



# 日本語学習者の「日本人の思考・行動様式に関するステレオタイプ認識」の意識化について

埴 誠一郎

## ■ はじめに

本レポートでは、日本語学習者の「日本人の思考・行動様式に関するステレオタイプ認識」について、日本語教育という観点から論じる。日本語学習者が日本人の思考・行動様式に関して固定的ないわゆるステレオタイプ認識を持っていることを自分で意識化することが重要であると言うのが本論の趣旨である。

日本語学習者の学習の目的は、日本語話者と日本語で自分の考えを表現することによってコミュニケーション出来るようになることである。外国語学習においては、文化も語彙・文法と同じ様に重要であるとする言語学的文化論の立場から、または、1980年代以降盛んになった異文化教育、異文化コミュニケーション教育の立場から、「日本語学習者が日本人とのスムーズなコミュニケーションを図るために、日本人の行動様式の社会的・文化的側面を教えるべきである。」という主張（水谷修，1990；ネウストブニー，1995）が現れた。しかしながら、「日本人の思考・行動様式」が固定化された体系的なものとして客観的に存在するかは疑問であること、内容的に「理解」してもそれを踏まえて行動出来るかは別問題であること、更に、そのようなステレオタイプ認識をすることによって対人コミュニケーションにおいて一番重要である、個人を個人として直視する態度が損なわれることがあるなどの問題がある。

このような日本語学習者の日本人の思考・行動様式に関するステレオタイプ認識は

どのように形成・維持されてきたのか、言語教育においてステレオタイプ認識は何故問題なのか、ステレオタイプ認識を変容させるためにはどうしたらよいかを考えて見たい。

## ■ 1. データとしての授業分析と考察

### 1.1. 分析対象の授業

ここでは、筆者の修論テーマ「日本語学習者の『日本人の思考・行動様式に関するステレオタイプ認識』の意識化について」のパイロット・スタディのデータとして、早稲田大学の授業を分析・考察し、韓国人女子留学生Cの日本人に関するステレオタイプ認識の変容を追跡、検討する。分析対象とする学習者Cの参加したクラスは、2003年度秋学期に早稲田大学日本語研究教育センターの実施した日本語専修課程研修「日本事情・言語文化」と日本語教育研究講座「言語文化B」の合併授業である。前者は、留学生（超級レベル：レベル8）のための授業であり、後者は学部生、院生、外部者共に受講可能である。実際には、留学生5名（うち2名は中途脱落し、終了したのはCを含む3名）、学部生2名、筆者を含む院生4名であった。

この授業では、各学習者が、次の活動を行う。

- ①「日本社会に住む魅力的な人」を探して、その人にインタビューする。
- ② インタビューを通して考えたことを、クラス内で報告しディスカッションする。
- ③ クラス活動を経て、レポートに仕上げ、最後に「日本社会に住むとは」または「言語文化」について考えていることを記述する。
- ④ 最後に相互評価する（自己評価を含む）。

学習者Cを分析対象者とした理由は、Cが当初から日本人らしさ、日本と韓国の文化比較などに興味を持っていることがうかがわれ、日本人の思考・行動様式に対する典型的ステレオタイプ認識を持っている学習者と思われたからである。学習者Cは、

「私にとって魅力ある人」を身の回りから探し、対話を実施し、クラスに報告してディスカッションを行い、レポートをまとめるという作業を行った。Cは初め日本人の集団主義、タテマエとホンネなど日本人の思考・行動様式に関するステレオタイプ認識を持っていたが、対話相手との接触を深め、グループ内ディスカッションを重ねるうち、対話相手の性格や生活態度を個人として捉えるようになってきた。これは他者とのインターアクションによって、自己のステレオタイプ認識を意識化し、社会と個人の多様性、複雑性を認識した結果であり、直後に実施したCとのフォローアップ・インタビュー（以下 FUI と略す）でも学習者の日本人観の変化が明らかになっている。

## 1.2. 分析と考察

### 1.2.1. 日本人に対するステレオタイプの形成過程

#### A. 「ステレオタイプ」と「日本人の思考・行動様式」の定義

ステレオタイプとは、ある社会集団の構成員が持つ思考・行動様式の特徴、傾向に関する固定的、画一的な見方、イメージをさす。例えば、外国人である日本語学習者が日本社会で暮らす日本人の思考・行動様式について、ある固定的な傾向があると信じ思い込むことを言う。ステレオタイプは個人の社会認識であるといってもよい。

また、ここで論じる「日本人の思考・行動様式」とは、勤勉、集団主義、タテマエとホンネ、上下関係の重視、イエス・ノーをハッキリ表明しない主体性に欠けた言語行動など、多くの日本人がそのような特定の傾向を持っていると日本人自身、または外国人（日本語学習者に限らない）が持っているイメージ、日本人の価値観に基づく社会的・文化的習慣と思われるものである。

日本人の思考・行動様式は、日本文化の一部、いわゆるスモールC、主観（主体）文化である。

また、「ステレオタイプ認識の意識化」とは、ある集団（日本人全体）に対して持っているあるイメージ（印象的知識）をその集団の成員である個人に当てはめた（ステレオタイプ化）とき、そのイメージがステレオタイプになることに自分で気づくこと

をいう。

## B. ステレオタイプの形成過程

教室の仲間である韓国人 P は、「韓国の大学の日本語学科では必ず「日本事情」があり、そこで初めて日本人の国民性についての講義を聞いた。それまでは日本人やアメリカ人の国民性について考えた事もなかった。だから日本へ来る(大学日本語科卒)韓国人は教科書に出ているような、ある種の先入観を持っていることが多い」と述べている。〈2003年10月22日クラス討論〉

P:CHさんのように、韓国で初めて日本語を習うとき、必ず「日本事情」の時間があって、そこでは、日本人の本音と建前ということを経験するようになってますんで(笑)、それが大学時代の「日本事情」の科目の時間に何でそれが出てくるかわかりませんが、その前までは、日本人がどうかとか、アメリカ人がどうかなどと考えたこともないんですが、やっぱり、それを聞いて勉強したから、彼女たちも私たちも、みんな先入観を持って日本に来たはずだと思います(後略)

CはFUIの中でも、「韓国の大学の日本語授業の中で使った「日本人と日本文化」という教科書では、「日本人の国民性」はこれこれであると書いてあり、日本語学習者はこれを尊重しなくてはいけない教師からといわれた。」「日本へ来る前、違う言語をしゃべる人は違う性格を持っていると思っていた。話す言葉が違えば、思考様式も当然違っていると思っていた。言語によって考え方が違う。韓国では学校教育で韓国の歴史はこう、文化はこうと教えているし、日本の歴史、文化は韓国と違ったものがあり、日本の学校でも教えている。また日本人と韓国人がきいたり見たりするニュースもそれぞれ違うから、持っている情報はそれぞれ異なる。だから日本人と韓国人は考え方が違っている」と述べている。

Cの当初の考え方は、日本人や韓国人を集団として観察、評価している「集団類型認識」であり、対象の固定的、画一的な捉え方、すなわち、ステレオタイプ認識である。認知社会心理学で、年齢、性別、国籍(民族)の3つは人に関するスキーマとして使用されることが最も多い(特に国籍)とされる(Fiske, 1998)。

Cのような日本語学習者が母国で（主として学校で）母国語で学ぶ日本の歴史や文化に関する情報のなかには「日本人の思考・行動様式に関する知識」が含まれているであろう。国や民族によって大きな差があるが、学校以外でも日本人に関する社会的知識、文化的ステレオタイプが家族、友人、マスコミから伝達され個人に受け継がれていることもある。社会心理学では、ステレオタイプの成立過程において、家族、友人、マスメディアなどを通じて伝達される「社会化」が、自己生成的に判断者のうちに発生するものより強力であるとされている (Macrae, 1996)。

ステレオタイプの形成・維持過程を分析調査することは、次にこれをどう変容させる事ができるかという問題との関係で重要である。

### 1.2.2. ステレオタイプの変容過程

#### A. 動機文作成時点での学習者Cのステレオタイプ認識と問題点

この授業では、学習者は、「日本社会に暮らす私にとって魅力ある人」を選んで対話をする事になっているが、Cはこの対象として、「韓国が大好き」と言ってくれた珍しい外国人である、日本人のサラリーマンSさん（以下S）を選んだ。Sを魅力ある人として選んだ理由【動機】、言い替えればSの魅力は、自分の国、韓国を大好きと言ってくれたこと、この人となら日韓両国の文化を比較しながら楽しく話せると思ったからのようである。（10月14日付Cの動機文）

Sさんは「韓国人は日本人と違って率直だ、ありのまま外に表す部分が気にいっている」と言った。もちろん、性格は人によって違うが、民族性はそれぞれ違う性格のどこかに潜んでいると思う。私が感じる韓国人と日本人も確かに違う。

私の国、韓国はSさんの目にどう映るのだろうか。Sさんの話を聞かせてもらいながら、私も気づいていない韓国人としての自らを省み、私に感じられたその響きの正体を探してみたい。

Cは「韓国人には韓国人としての性格、日本人には日本人らしい性格、すなわち民族性があり、Sが日本人らしくない性格（率直な性格）をもっているので魅力を感じた。

日本人の考え方が全部同じとはもちろん思わないし、習慣も人によってもちろん違うが同じ部分が多いと思う」と述べている。すなわち、最初の動機文を書いた時点でCは、日本人や韓国人を集団として観察、評価している「集団類型認識」であり、固定的、画一的な捉え方、すなわち、ステレオタイプ認識を強固に持っていたといえよう。教室の仲間から、「『Sの性格の中に日本人の民族性を見つける』という考え方でなく、Sそのものを見たらどうか」「私達は、韓国人としてのCではなくて、C個人について知りたい」とのアドバイスが出た。すなわち、国と言う枠にとらわれた人の見方を脱却すべきではないか、個人の個人としての性格、態度などをみるべきであるという主張である。＜10月15日クラス討論＞

CH：Cさんも、この部分、「Sさんの性格のどこかに民族性が潜んでいる」とかを抜けて、もう一回考え直したら、Sさんがほんとは見えてくるのではないかと思います。

SH：韓国人としてのCさんじゃなくて、Cさんそのものについて知りたいですね。そのほうがCさんの魅力が出てくると思います。

これに対し、Cは、以下の通り強力に反駁する。(10月21日付 動機文③)

「日本人らしさ」とは何か。それは私にはまだ分らない。でも何故か、日本人の性格を分析する本が多くてよく売られている。同じ社会制度の中で作られる性格に対する一言の評価は皮相的になるしかない。そのような評価を見ると、大体「日本人は秩序を尊重し、集団主義が強くて自分の本音を表さない(\*)」と書いてある。「日本人は全部こうだ」と言うような言い方は固定観念に見做されやすいとしても、なぜか私が付き合ってきた日本人の中にはそれを外す人があまりいない。腹を割ることができる人は韓国人の中にもなかなかいないが、日本人にはもっと近づきにくい。

Cは「同じ社会制度の中で作られる性格に対する一言の評価は皮相的になるしかない」とみとめつつ、「日本人が秩序を尊重し、集団主義が強くて自分の本音を表さない」(日本人の思考・行動様式に関するステレオタイプ認識の一例。このような傾

向を持っている日本人は「日本人らしい日本人」と言うことになる。)と本に書いてあることは、日本人全部がそうではないだろうが、自分の経験では大体当たっているという。

これは厳しく評すれば、自分の今までの経験を絶対視し、それに基づく日本人に関するステレオタイプについての自分の解釈に固執している態度である。

日本人に関する強固なステレオタイプ認識を持つことにより対人コミュニケーションにどんな悪い影響が生じる可能性があるかと言えば、Sの属性を日本人の属性と重ねて見てしまい、S個人に対する観察を曇らせるものになる。つまり、対人コミュニケーションで一番重要な、個人を個人としてみていたいことを伝え合う態度が損なわれることになる。

教室の仲間の韓国人CHは、「本に書いてある日本人の性格に関する情報によって、Cが知らず知らずそれが事実だと思いこんでいるのではないか」と指摘する。つまり、日本人の性格はCが実際に日本人に接して得られた観察の結果ではなく、本で読んだり、人から聞いたりした話による思い込み(=イメージ、虚構)ではないかという指摘である。<10月22日クラス討論>

CH:あのう、「本音と建前」の話はほんとに面白いんだけど、例えば、日本の人が「可愛いね」っていうと、「これは本音じゃなく建前でしょ」ってほんとに言うんですよね。冗談みたくな。その人、ほんとにそう思って言ったかもしれないけど、それを聞いた外国人は、「今は建前」とか、勝手にそう思う。多分、それは、Cさんが本でそれを読んでいて、知らず知らずのうちに、「日本人には本音と建前がある」とか、ずっと頭の中に書いてあるように思って、だから本に書いてあるものの影響もあるんじゃないのかなと。

このように、もし、日本人の言動にはホンネとタテマエがあり、ホンネを言わずタテマエを言うことが多い【=自分の本心を隠すことが多く、率直でない】と言う先入観を日本語学習者が持っているとするれば、日本人とのコミュニケーションに阻害をきたすことになり兼ねない。

## B. 教室の仲間からの働きかけによるステレオタイプ認識の変容

ステレオタイプ認識をもつことにより、他者を国籍などによって画一的に判断し、対人コミュニケーションで一番大切な、個人を個人として見ていたい事を伝え合うという態度が損なわれるとすれば、そのステレオタイプ認識の影響を受けないように何らかの形で抑制する事が考えられる。すなわち、日本人という枠組みである人を見て、日本人としての特性、傾向を持っていると信じている学習者Aがいれば、日本人と言うカテゴリーで人をみないで、ひとまず国籍を離れた個人としてみるべきであることを、Aに働きかければよいと考えられる。

教室の中で、目的や効果を意識するとしないに関わらず、他の学習者（あるいは教師）がAに対してこのような働きかけを行うことは有効であるはずである\*。この授業において、Cは対話の対象者である日本人Sに当初強いステレオタイプ認識を持っており、教室の仲間はCに、S個人の性格、態度を観察し、意見を聴くよう繰り返し働きかけている。

10月29日、CはSとの対話の質問事項案をクラスに提出した。それによると、Sの外国人に対する考え方、文化の差、日本人の性格に関する評価などを挙げており、CはSを個人として見るよりも、依然、日本人対韓国人、日本対韓国、自国対外国を強く意識している。

グループの学習者から、「日本人としてのSではなく、S個人の考え方に魅力を感じたと言っているが、結局、CはSの日本人らしさ（国民性）や韓国観を知りたいのか」という意見、「S個人の外国人観を知っても日本人全体の外国人観がわかるわけではない」との意見、「CはSのどんな性格や態度に魅力を感じたのか知りたい。」の意見などが出た。＜10月29日クラス討論＞

CH：Cさんは、「異邦人」がテーマで、「異邦人」は、Sさんでもあるっていうんだけど、インタビューの内容で、例えば、外国人に対する考え方を聞いたり、日本

---

\* 社会心理学では、ステレオタイプを抑制することは、その意図に反し、却ってステレオタイプに基づく反応を生じさせやすくなる場合(ステレオタイプ抑制のリバウンド効果)も報告されている。(Macrae, 1994)



人とか、韓国人に対してとか分けたりして、結局、最後は何か、日本人らしさを  
知りたい、Sさんの目に韓国がどんなふうに写っているかを知りたい、そういう  
ふうに読めるんです。

C: このテーマでSの韓国人に対する考え方を聞きたいと思ったのは、Sさんにとっ  
て私は異邦人じゃないですか。それで、私のような外国人に会うとき、私の方  
に偏見とか、今まで考えてきた相手の国に対するイメージとかがあるのか聞きた  
いと思って。

H: 文化に対する姿勢とか、あるいは、外国人に対してどのような態度で接し  
ていますかとかはCさんのテーマに関連するんですけどね。

Cは、自分が持っているような外国人に対する偏見やイメージを、相手も持っている  
のかどうかに関心があるとしていて、依然「日本」「韓国」と言う国の枠にとらわ  
れた見方から抜け切れないでいる。また、日本人のイメージとして一般にいわれてい  
ることは自分の経験に照らして見ると、やはり当たっている部分が多いと主張する。  
韓国人Pは韓国の教育環境を指摘しつつ、日本人に対する先入観を外して、その人  
個人の魅力を探すべきであるとアドバイスする。

P: 彼女たちも私たちも、日本人についての先入観を持って日本に来たはずだと思  
いますが、個人個人によって違うし、そういう先入観を持って人間を見てはいけ  
ないなって。それで、CさんがSさんの魅力を探すときにも、先入観をはずして、  
ほんとにその人の魅力がどこにあるかを探して欲しいなって思いました。

その後クラスで、「そうすると、Cの日本人に対する先入観を外してくれたSの率  
直さの他にSの魅力はどこですか」と問われたのに対し、Cは、「相手を違う国の人  
だと偏見を持たなくていい、親密に感じられる性格がSの魅力かもしれない」と、日  
本人Sではなく、S個人の個性にはじめて目をむけた。

SH: Sさんに感じた魅力が、なんとなく、日本人論、韓国人論になっている。日本  
人対韓国人ということではなく、また日本人Sではなく、Sさんから感じた魅力  
を知りたい。

F: Sさんが率直で、偏見を持たず、むかしから知っている人のように親近感を覚

えるのが魅力だとしたら、そこをもう少し突っ込んでいったらどうですか。自分とタイプが違うひとが何故自分にとって魅力があるのか。自分が関心がある事についてSさんの意見をきいて見るとか。

ステレオタイプ認識がすべて悪いもの、出来れば0にしたいものであり、個人の個別的情報によってすべて取って代られる事が望ましいものであれば話は簡単である。ステレオタイプ認識をすべて抑制、消去し、対人コミュニケーションにはその個人固有の情報を使用すればよい。ところが、広くかつ深く相手の個別的情報を収集し、それだけを判断基準とした積りでも、社会的カテゴリーに基づくステレオタイプを完全に排除することはできない (Brown, 1995)。

さらに、ステレオタイプは相手の印象形成の初期段階で活性化するが、相手の個別的情報が入手され、援用されるに従って修正、変更される。すなわちステレオタイプは我々がその後更に情報を求めるための暫定的仮説として働くと言う性質を持っている (Darley & Gross, 1983)。

教室の仲間である中国人Fは、BBS上で次のようなアドバイスをしている。

私の理解では、社会・文化という内容のすべては、ひとが他人、他の民族、他の社会を勝手に解釈して、自分を安心させる手段の一つだと思います。その解釈から誕生したステレオタイプも、安心感を与えると同時に客観的なものの見方を妨害するという両面性があると思います。

個人が個人を認識する場合、初め、国、人種、男女、身分、年齢などのステレオタイプで安心するために無意識に解釈し、のちに意識的にステレオタイプを壊していったりより客観的に相手を認識して行くようになるのではあんいかと思います。

Cさんも、国というカテゴリーに基づかないで個人を認識する視点でもう一度考えて見たらどうですか。

Fが主張するのは、われわれは無差別に考えなしでステレオタイプを援用するのではなく、むしろステレオタイプは、その後更に求める情報のための「暫定的仮説」と

して働くと言う意味である。言い替えればステレオタイプは入口の仮説として有用な場合があるのではないかと、しかしその後意識的にステレオタイプを壊すべきという主張である。

以上のようにCは、教室の仲間から、国と言う枠で個人を観察し付き合うのではなく、個人を個人として性格、態度を観察し、意見を聴くべきではないかと言うアドバイスを繰り返し受けている。

更に、Cは経験・情報とステレオタイプとの関係について次の通り。＜2003年11月17日付けメール（教室参加者間のBBS）＞

経験と情報の関係については次のように考えます。

「経験を通じてその情報の妥当性を判断して、適切ではない場合はその情報を変えて再認識する過程が、私にとっての「理解」ではないかと思います。重要なことは、早合点しないこと、その時その時に理解したことで結論を下さないこと。」理解を繰り返す過程で何度も判断するはずですが、それで終わりじゃない、結論は一生下せない、しかしその時の判断は存在する、ということです。

つまり、私が認識する情報は男女、年のようなものであって、その中に国籍の情報も入っています。国籍の問題を指摘されましたが、私の場合国によって違うと認識するのは、相手を把握して「うまく付き合うための手段」なのです。「判断の基準」だとは思いません。

それから経験を繰り返す過程で私が持っている情報は変わっていきます。それが私にとっての「理解」だ、ということです。これが「暴力的で安易な考え方」なのでしょうか\*。それでも批判的に情報を判別して経験を重ねて行く過程でそれを再認識すれば、それでいいと思いますけど。

Cは、ここで「経験を通じて情報を修正し再認識するのが私の理解である。大切なことは早合点しないこと、理解したことを絶対視しないこと」と述べている。「人を

---

\*TA から、個人の性格を「国籍」と結びつけた性格にするのは「暴力的で安易な考え方」と批判されたことに対する反論。

判断するときの手段として年齢、男女、国籍などが入ってくる、これは「判断の基準」ではなく、「付き合うための手段」である、情報を経験によって再編成すれば良い」としている。これは、国籍による判断基準に固執し続けることを放棄し、Fの意見を結果的に一部取り入れたことになる。

CはFUIで、次のように述べている。

放っておくと、色メガネの中でも、国籍の色メガネは特に強いと思う。また、外国人から日本人は特殊だと思われがちなのも事実である。今まで持っている日本人のイメージどおりに判断するではなく、経験から習うのが重要であると思うし、一方、経験を絶対視せず、「経験の再編」することの大切さはよく分かっている。経験を重ねる過程が重要であり、そこで何故、どうしてと考えることが大切だと思う。

#### C. Sとの個人的接触の深化によるステレオタイプ認識の変容

社会心理学の歴史でもっとも良く知られている考え方に「接触仮説」(contact hypothesis)がある(Alport, 1954)。ステレオタイプや偏見の形成される原因は、相手に対する知識の欠如だから、ステレオタイプの変容のためには対象となる集団に属する個人との接触が必要であるという仮説である。しかし、日本人に関するステレオタイプを変容させるには単に、出来るだけ数多くの日本人に会わせれば済むと言う事ではない。また、一対一の個人的接触であればいいと言うことでもない。数回の、短時間の、場当たりの接触では、場合によってはステレオタイプ認識を確認、強化してしまう場合もあるであろう。

Brewer & Miller (1988) は、ステレオタイプ変容のためには、「個人化した接触」によって、他者を判断する際にカテゴリーを用いないようにすることを提言している。「個人化した接触」とは、内外集団の個人と個人が、自己関与がある(＝相手と自分自身との結びつきが深い)関係を持ち、カテゴリー化に基づく情報処理や相互作用が減った状態をさす。自己関与がある関係とは、お互いに相手を理解しようとし、善意

の信頼がある対等の関係とされている。

Cは、自己関与がある状態で、すなわち理解と信頼の動機に基づいて自分の日本語先生の友人であるSと3度、4度と接触し、1度は延べ10時間以上に及ぶ対話を重ねるうち、Sの個人としての属性（性格や態度、意見）に関心を深めていくようになる。＜2003年12月2日付 産出文①＞

そしてそんな自分の性格と反対に、Sさんは積極的に働きかけて人間関係を広げていくタイプだったので、人間関係のバランスがよく合ったのでは、私は持っていない積極的な姿勢から魅力を感じたのでは、と思った。インタビューしながら感じたことは、Sさんの性格と私の性格には極端な差があるということである。その差は性格ではなく、視野の幅なのかも知れない。

#### ＜同産出文②＞

Sさんは「対人関係で他人にアドバイスするならば、「前に」「アクティブに」「本音」この3つだけ持っていればすべてOKだと思うんだけど」といった。また、「外国人の友達を持つことは僕にとって自然なことで、いろいろな価値観を開けることは楽しくて勉強になることもあるけどね、少しいやらしい表現だけど、今後自分が将来行っていくビジネスに対して彼らが強力なパートナーとなり得るということもあるのよ。」ともいった。

結婚したばかりのSさんは、いつか鼻歌を歌いながら「面白いなあ今は、未来のことを色々考えなきゃならないから」と言った。多分、私が一家を支えなければならぬ立場だったら文句ばかり言うに違いないだろう。人生を積極的に生きて行くSさんの前で、私は何か恥ずかしくなっていた。質問することさえも面映くなった。Sさんが全部正しいとは言えない。そして私の性格が悪いとは言えないとしても、私の狭い視野に作られた考えは恥ずかしく思うしかない。

Cは、自分が魅力を感じたS個人の性格として、人との信頼関係をもとにした付き合い方、積極的なチャレンジ精神、「鼻歌」に象徴される楽観的な人生観を掴んだ。ステレオタイプ的一种である「国民性」は入口の参考情報として利用するが、その人

個人と深くつきあうことによって情報の影響力がなくなり、相手そのものの見方が変わってくると述べている。ここでCのつかんだSの性格、生活態度や意見は、日本人の国民性とは直接関係が無い。すなわち国と言う枠にとらわれたものの見方を脱却している。＜2003年12月3日クラス討論＞

C H：Sさんとの対話で、「偏見とは本来どのようなものなんだろう」「文字や本より学び取ることよりも、経験から来ることの方がはるかに影響力が高いのではないかと思う」というのは、Cさん自身の考えですか？

C：いえ、Sさんの考え、でも私もそう思っています。国民性の話をするとき話しましたが、相手がどんな人か全然分からないときは、基本的な情報として利用するじゃないですか、それを。例えば、相手の国でこうすればいけないということを知っていれば、こうすればいけないんだな、と思いながら対する。その後親しくなれば、それがだんだんなくなる、という意味です。相手がこうしても良いんだなと思うと、その情報の影響力がだんだんなくなって、つまり、経験していきながら、相手に対する見方や態度を変えていくという意味ですけど。

Cは、「国民性に関するステレオタイプ認識は入口の基本情報として利用するだけで（いわゆるステレオタイプの効率性）、その人と深くつきあって行くあいだにその人そのものを見るようになった。Sさんの人とのつきあい方、チャレンジ精神に、殻に閉じこもりがちなのが身を内省した」と述べている。

CはFUIで、

*Sさんと接して初めは日本人としてのSさんと思って見ていたけど、段々親しくなり、深く付き合うようになって個人としてのSさんとして考えるようになって来た*

と述べている。

これはいわゆる理解と信頼の動機に基づく個人化された接触（personalized contact）である。Sとの個人化した接触は、カテゴリー化をなくす、すなわち「日本人」というカテゴリーから脱却する（脱カテゴリー化）ことに役立っている。

## D. 学習者 C のステレオタイプ認識の変容

C は、上記のようなクラス内討論や S との対話によって、対人コミュニケーションで、相手の世界と文化はその話す言語や国籍によって完全に規定されるものではないと認識するようになった。すなわち、対話相手の日本人 S を日本語を話す日本人としてではなく、個人 S として性格、態度、意見を観察するようになった。＜12月3日のクラス討論における C の発言＞

対人コミュニケーションで重要なのは、相手の意見によく耳を傾けること、自分の世界と文化による解釈と同様、相手の持つ世界と文化による解釈を尊重しようとする態度である。相手の世界と文化はその話す言語や国籍によって完全に規定されるものではないということがわかった。

## ＜2004年1月14日付 産出文から①＞

動機の話にかえる前に、「主人公は私!」というタイトルについて話したいと思う。このタイトルは今回インタビューしてくださった S さんに一番感心した部分であり、自分にかける呪文のようなものでもある。最初に漠然と思っていた S さんの魅力は、確かに「変わった日本人」であることだった。今も S さんは変わった日本人だとは思いますが、(変わった日本人というよりも変わった人の方に近い) 結論から言うと、魅力の源はその変わったところにあるのではなく、物事に対する姿勢にあると思うようになった。それは自分とは違う積極的な姿勢であり、違うから魅力を感じたのではなく、現在の自分に切実な姿勢だということが分かったからである。

一言で言うと心からの友達を求め、常に自分から働きかけて人間関係のネットワークを広げようとするオープンな心構えが魅力の一つで、後はその積極的な姿勢と人との付き合いが未来観に繋がっていて、自分からこの世を変えようとする強い意志である。

C は、S の心からの友達を求め、常に自分から働きかけて人間関係のネットワークを広げようとするオープンな心構え、その積極的な姿勢と人との付き合いから自分の人生を切り開いて行こうとする姿勢に感心している。「変わった日本人」でなく「変わっ

た人」と国籍の要素が消え、S個人の人生観、人生に対する態度をしっかりとつかんだ。  
＜同産出文から②＞

私の最初の問題点は言語と国によって考え方も違うようになるという、原因もわからない一種の信念から始まった。私としては、国による特性の違いがマニュアルとして当たり前のように頭の中に形付けられ、どうしても無視できないことであった。何の疑いもなくそう思っていた。それには本質的な違いがあるのか、もしくは単なる印象の違いに過ぎないのか。かなり悩んだあげく、その問題はまた言語の役割に繋がるのに気付いた。考えれば考えるほど、疑問の範囲は続々と大きくなった。言語と意識はどう関わっているのだろう。言語はただ意思を伝える手段に過ぎないのか。

Cは、「言語と国によってひとの考え方が違うようになるという、原因もわからない一種の信念から始まった。国による特性の違い」がマニュアルとして頭の中にあった。」と述べている。

Cは、FUIで「レポートを書いた後では、「典型的な日本人」像を追うのはバカなことだと思った。日本人はこう言うものだと思い込むことはバカらしい」と述べている(すなわち、国を枠組みとしたステレオタイプを持っていたことを意識化している)。  
＜同産出文から③＞

そこまで考えた後、また「コミュニケーション」という巨大な問題に辿り着いた。他人は私でないから、他人の心や意識、思考を完全に知ることは出来ない。それは絶対できないとしても、他人に接する時に見えること、感じることなどから一部だけでも知ることはできる。

さて、今回の活動を通じて思い知ったコミュニケーションの意味とは、人に接する時の言語自体にあるのではなく、私によって解釈される世界と他人によって解釈される世界との出会いにあった。その二つは平行線を保つだけではなく、お互いに影響を及ぼし変容しつつある。その上、二人きりのコミュニケーションだとしても私と相手



以外の存在も関与しているから、人の考えを理解することには、その人が生きていく全般的な環境を含んだ世界と文化を考えざるを得ない。

Cは、「コミュニケーションの意味は言語自体にあるのではなく、私によって解釈される世界と他人によって解釈される世界との出会いにあった。その二つはお互いに影響を及ぼし変容しつつある。」「そのひとが生きていく全般的環境を含んだ世界と文化を考えざるを得ない」という理解にまで達したと考えられる。＜2004年1月21付 最終産出文から＞

そういう意味で、日本社会に住んでいる人物にインタビューをする作業が、結局日本という社会の中での小さな部分でも理解するためではなかったのか、と思った。しかし、その具体的な実体は見つけられなかった。代わりに、私の言語の変容を促す、他人によって解釈される世界の存在が一番多く認識できた。特にその言語を理解することの多くの部分が逆に自己理解に依存しているということが分かるようになった。何故、私は未だにそれに気付かなかったのだろう、と、言わばショックのようにそう感じられた。

Cは「Sとの接触を通じて日本社会の一部でも理解しようとしたが、その実体は見つからなかった。他人の言語、考えを理解することの多くの部分が自己理解に依存していることに気が付いた。このレポート作成は「私の言語」が生まれて来る過程であった。」と述べている。

## ■ 2. 結論と課題

ステレオタイプは、一種の集団類型認識であり、これにより個人を個人として見る目が曇りコミュニケーションに阻害を来たすと言う反面、人間認識の不可避的な過程で生ずるカテゴリー化の一種であると言う面がある。従って、ステレオタイプ認識自体は、これを完全に人の心から消去することとは不可能であるが、自分自身がステレオタイプ認識を持っている事を意識して、自らの思考や心の動きをモニター出来るよ

うになれば、その変容を客観視できるようになろう。その基礎として、社会や文化は多様性があり、それを観察している自分と同様絶えず変化するものであることを自覚している必要がある。

上記の授業分析で、Cは、教室の仲間から繰り返し、国と言う枠で個人を観察し付き合うのではなく、個人を個人として性格、態度を観察し、意見を聴くべきではないかと言うアドバイスを受けている。このように教室の仲間からのアドバイスは、日本語学習者のステレオタイプ認識を意識化させ、変容させるのに有効である。

一方、Cは、自分の日本語先生の友人であるSと3度、4度と接触して対話を重ねるうち、その人そのものを見るようになり、Sの個人としての性格や態度、意見に関心を深めていくようになる。

CはFUIで、「Sさんと接して初めは日本人としてのSさんと思って見ていたけど、段々親しくなり、深く付き合うようになって個人としてのSさんとして考えるようになって来た」と述べている。

ステレオタイプ認識の変容のためには、このように、他者を判断する際に、理解と信頼の動機に基づき相手に対する注意を高めつつ「個人化した接触」(personalized contact)により、脱カテゴリー化(decategorization)することが有効である。例えば、「日本人」と言うカテゴリーを外して他者を観察し、接触するということである。

このように、この授業分析では、ステレオタイプの意識化の為に、教室の仲間からのアドバイスと対象との個人化された接触が有効である事が確認された。

日本語学習者は、教室内外の日本人(日本語母語話者)と生の具体的インターアクションをすることにより、日本人の思考・行動様式の現実的、具体的姿を知り、それぞれの個性に注目し多様性・可変性を認識して積極的に評価することによって、ステレオタイプ認識や偏見を変容させることが期待される。学習者が自身で日本人、日本社会と直接インターアクションを持つ中で、自分の目で確認した独自の日本文化像、日本人像を築いて行くことが大切である。

CはFUIで、次のように述べている。

- ①「Sさんと話したのは、日本人や日本社会のことが分かるようになるためであった。しかし、「日本人や日本社会の具体的な実体は見つけることができなかった。」
- ②「言語に関する本やウィトゲンシュタインを読んだが、日本人観というものは、本や先生から習うものではなく、日本の社会の中で現実の人と接しながら、自分で作って行くものだった」
- ③「『日本人とは』を知るためには、日本人の直接的接触と自分自身での意見形成が重要である」

また、日本語教育との関係では、日本語授業において教師が「日本人はこのような考え、行動するから日本語学習者はよくこれを理解しておかなくてはいけない」と概念的、一般的に与えることは避けなければならないし、学習者が「日本人は——」とステレオタイプの発想をした時は、果たしてそれは本当か問い、更に、多くの日本人と具体的に接触して、個性に着目しその多様性、可変性に気づかせることと、いかなる他者であれ、人間として同時に多くの価値観を共有することに気づかせるよう促すことが必要であろう。

以上のように、日本語学習者のステレオタイプ認識を意識化させ、変容させるためには、仲間の学習者や友人からのアドバイス、教室内外における日本人との個人的接触とその深化などが考えられるが、それぞれがどのような条件のもとで有効か、両者の関係はどうかなどについては更に検討を要する課題である。

## 参考文献

- 岡隆・佐藤達哉・池上知子（編）（1999）偏見とステレオタイプの心理学 現代のエスプリ，384.
- 小川貴士（1995）異文化理解における「文化テキスト」の読みと認識 ICU 日本語教育研究センター紀要，5.
- 上瀬由美子（2002）ステレオタイプの社会心理学—偏見の解消に向けて サイエンス社
- 唐沢穰他（2001）社会的認知の心理学 ナカニシヤ出版
- 川上郁雄（1999）「日本事情」教育における文化の問題 21世紀の「日本事情」，1.

牲川波都季（2004）日本語教育における言語と思考—その意味づけの変遷と問題点 横浜  
国立大学留学生センター紀要, 11

細川英雄（2002）日本語教育は何を目指すか—言語文化活動の理論と実践 明石書店

細川英雄（2003）『個の文化』再論：日本語教育における言語文化教育の意味と課題 21  
世紀の『日本事情』, 5.

ネウストプニー, J. V. （1995）新しい日本語教育のために 大修館書店

吉野耕作（1997）文化ナショナリズムの社会学 名古屋大学出版会

MacRae, C. N., Stangor, C. and Hewstone, M. (1996) *Stereotypes & Stereotyping*. Guilford Press.

Stangor, C. (2000) *Stereotypes and Prejudice*. Psychology Press.